

「なぜ？」と考えることは楽しく、人生を豊かにする

コミーの創業時代と3人の先生

私は今74歳。中小企業の経営をしているが、教育ほど深いものはないと思いつけてきた。

私は高校時代に猛勉強して、地方の大学の工学部に入ることができた。そして一流の部品会社に入った。周りは一流大学出ばかり。私は記憶力が悪く、そのうえ口下手で、議論に入っていけないこともよくあった。皆に会社の役に立たないと思われるのは極めて辛いことである。その時、給料はたくさんもらっていたが、近くのラーメン屋夫婦のほうがよっぽど幸せに見えた。今でいう鬱気味だったと思う。その会社は3年半で辞めた。

辞める前に、高校時代の担任の先生に手紙を書いたら「あと半年考えろ。それでもどうしても辞めようと思うなら相談に乗ってやる」という返事もらった。その先生とは卒業後もやり取りが続いていて、年賀状も含めると100通以上の手紙をいただいた。私にとって貴重なお宝である。

会社を辞めたあとは、肉体労働など色々な職業を転々とした。金も信用もなくなってきたころ、お店のシャッターに文字を書く仕事がお金になるとわかった。必死にレタリングの勉強をし、文字書き塗装業を始めた。そうなるに弟子がいる。当時は給料も安く厚生費などはゼロだったが、田舎の

高校教師をしている義兄に相談した。「教え子に字がうまい小山というのがいる。山奥育ちで素直だ」とのこと。それが私の45年の女房役、小山嘉徳だ。義兄は私と教え子の性格(DNA)をよく知っていたのだと思う。

その後、もう一人ほしいと相談すると、義兄の上司だった大物校長を訪ねてみると言われた。毎年、年始に訪問するたびに「君んとこの年賀状は面白い」とだけ言われた。五年目くらいだったろうか。「そろそろ、あんたのところも……」と言い、受け持ちの先生を呼んで田村敏保という生徒を紹介してくれた。私、小山、田村というコミーの古株3人は、3人の先生と深い縁があるが、3人の先生とも人の性格を見る能力があったのだと思う。

会社には色々な性格の人がいる。コミーは「売り上げの拡大よりも、出会いの喜び、創る喜び、信頼の喜びを大切にすると宣言している会社であるが、今、小宮山は出会いの喜びを、田村は創る喜びを、小山は信頼の喜びを追及することに時間を費やしている。お互いの良いところを伸ばし合えば、その会社はうまくいく。小宮山、小山、田村をはじめ、社員がお互いに信頼し、足りないところを補い合っているからコミーはうまくいっている。校長、教頭、先生たちの関係も同じではないだろうか。

「教育」よりも「なぜ力」を

なぜなぜと問い続ければ自然と育つ

コミーはその後、ミラーメーカーとして変貌を遂げ、現在は約三十数人が働いている。次世代に会社を引き継いでいくためには社員たちを「教育」しなくてはならない。

語志喜の会[※]のメンバーの尾形尊信さんは、「そもそも教育という日本語が良くない」と言っていた。尾形さんは『英語の誤訳』（丸善ライブラリー）という本を出している

のだが、その中で「英語の Education とは、『本来才能を引き出すことで単に教育ではない』人が人を教えることなどできない。教えるといったとたんに、高みから生徒に先生が知識を押し付ける雰囲気となる。人も花も、内なる遺伝子の命令にしたがって、外なる環境と雰囲気の影響を受けながら、自分で育つのであって、他人が育てるなどということはできない」ということを書いている。

確かに教育という言葉は、上から目線で正解まで教えるイメージがある。そういえば東京都初の民間人校長になった藤原和博さんは、「これからの時代は正解はなく、どう納得解を導き出していけるか」と言っていた。

では、コミーはどう社員の才能を引き出し、納得解を出していけばいいのだろうか。私は、そのためには疑問に思ったらそのままにしないで、「なぜ？ なぜ？ なぜ？」と考える習慣をつけることが大事だと思う。

以前、新人がちよっとしたミスをして、ベテラン社員が「なぜ？」と問いかけたことがあった。そのときは、なぜを6回繰り返して真因がわかった。「なぜ？」と唱えることで自分の主観が消え、物事の事実が浮かび上がってくる。批判や言い訳で問題から逃げることもなくなる。なぜミスをしたのか、制度や仕組みが悪いのか、仕組みが悪いならなぜ良い仕組みを提案する人がいないのか、とさらに考えることもできる。

なぜ生まれた、なぜ育った、なぜ出会ったという日常に対する飽くなき「なぜ？」は、「すごい！」という気づきになり、その気づきは「おかげさまで」という他人や社会への「感謝」につながる。「なぜ？」と考えることは楽しく、人生を豊かにすると思う。



コミーの古株3人(左から小宮山、田村、小山)。海外売上比率が半分以上になったのに3人とも英語は全くダメ。